

## 土木屋一年生のココロ

— 土質基礎研究室に配属された新人2人のツブヤキ —

平成2年4月2日(月)、着なれないワイシャツとネクタイをし、スーツに身をまとい、どこから見ても“新人”という身なりで、土質基礎研究室に入る。

初日、1日中緊張し辛抱すること8時間、“やっと帰れる!”と思ったその瞬間“さて、のむぞ!”の一声。僕らの歓迎会である。まさか、初日から飲むとは思ってもよらなかった。

いざ、宴会が始まると“力水”と称して、日本酒、ビール、ウイスキーを浴びるように口にそそぎ込み、カラオケでは今日ばかりと歌いまくり、ついには先輩の持ち歌まで歌ってしまった。それ以来、カラオケは歌わせてもらっていない。酔っぱらって外にでてみると、僕らと同じような見るからに新人といった人達が先輩と思われる人に抱きかかえられていた。僕らの先輩も肩をかしてくれた。

僕たちの社会人1日目は酒によって幕を落とされた。

\* \* \*

まず最初に言われたされた仕事は、部屋の人の顔と名前を一致させることであった。土質基礎研究室は僕らも入れて13名であり、比較的早く覚えることができた。これから長いつき合いをしていかなければならないので、早く部屋の雰囲気慣れようとココロがけた。僕らの名前を早く覚えて欲しかった。しかしそのころはみんな忙しく、そうそう僕らにかまってくれない様子であった。それから、僕らの仕事は土質基礎に関する基礎知識を1日も早く修得することであった。とりあえず、専門書を読むことが、僕らの仕事の1日であった。1日中本を読んでいるというのも辛いもので、僕らの希望としては、現場で外の空気を吸うことであったので、少し疑問を感じた時もあった。まあ、本の内容は、専門用語ばかりでまともに読み進めることもできず、ただただ、眠かった。“学生時代の基礎からやり直さなくては”と思い、学生時代の本を引っぱりだして勉強を始めた。実験室には沢山の試験機器があり、いままで聞いたこともない機械の説明を受けた。必死に覚えようとしたが、頭がパニックで聞いたことは虚しくも脳裏を通過し1度では覚えること

ができなかった。その後、マニュアルなどを見ながら試験機器を操作し、使えるようになったのは1カ月くらいたってからであった。新人にとっては重たすぎる毎日であった。大学時代に習ったことをろくに覚えていないのに、さらに一歩進んだ研究をやっていかなければならないということに関して、一抹の不安を覚えた。

\* \* \*

A E、コーン指数、負の周面摩擦力、先端抵抗力、ジオテキスタイル、EPS等わからない言葉は土木用語辞典をひき、ひとつひとつ確認していった。辞典にでない言葉は誰にも聞けず、だいたい慣れてきたころに先輩に恥を忍んで聞いてみた。先輩は優しくしかも丁寧に指導してくれた。そのうちだんだん調子に乗って事あるごとに先輩に聞いていたら、“少しは考えろ”といわれてしまった。

\* \* \*

土質基礎研究室では、よく飲み会がある。5月には花見があった。“花よりだんご”という諺があるけれど、土質基礎研究室では“花よりお酒”の方がピッタリくるかもしれない。そういえば、花見の場所は百景園で、花なんて一輪も咲いていない所だった。“花はなくても酒あれば陽気になれるこの10パイ”という歌をうたってしまいそうな花見であった。でも、来年こそは、桜の木の下で花見をやってみたいな。このほか、誰かの誕生日、新車購入、所内公開……となんだかんだ理由をつけて飲むことが多い。

きわめつけは、大通り公園のピヤガーデン。土質基礎研究室では毎年ピヤガーデンの初日に全員でイッパイやることになっているとか。今年は初日が土曜日。午後1時から大通りの8丁目飲み始めた。天候には恵まれたが、まだ陽が高く、客は僕ら以外にアベック一組。やがて客が次第に増えだして、もうそろそろおひらきかと思つた3時過ぎ。隅っこで1人淋しく飲んでいた外人に冗談で“一緒に飲もうか”と声を掛けた。“サンキュー、アイムハッピー”とかなんとかいってやってきて、それ

から大騒ぎ。飲んだ勢いもあって、メチャクチャな英語でワーワーギャーギャー。そのうちにその外人の仲間というのが数人もやってきたからもう大変。オゴツたりオゴられたりで、いつまでたってもビールのジョッキは減ることがない。盛り上がって、舞台上上がってクイズに挑戦したツワモノまでいて……、やっと8時に解散した。この夜、夢にまで英語が飛び交っていた。

\* \* \*

研究所の仕事は室内ばかりの仕事ではなく、現場に出張して調査や計測を行うという仕事もある。初めての出張で、先輩に“忘れ物をするなよ！”といわれていたが、やはり忘れてしまった。ズボンとサイフとパンツである。直接仕事には関係なかったのですが、ちょっとホットしていたら、充電されていたはずの試験機のバッテリーがからになっていた……顔面蒼白。

現場出張の仕事は、日中のときもさることながら夜の

おつきあいもなかなかのものであった。昼は、砂置換の砂をゆすって早く落とそうとしたり、夜は、学生気分になり思いきり飲んで、ついには吐いたり、先輩のフトンに寝てしまったり……。そんな出張の中でまだまだ仕事を知らず、世間を知らない自分達が情けなかった。一緒に出張に行った先輩方が優しく指導してくれました。どうもありがとうございました。

\* \* \*

そんな僕らもやっと9カ月がたった。最近じゃ残業になっても、ちっとも苦にはならなくなってきた。もちろん早く終わることにこしたことはないけれども……。まだまだ未熟な僕らであるが、早く仕事のできる技術者・研究者として働きたいと思っている今日このごろである。

(記 蛭沢 敦, 玉田隆志)

\* \* \*